

豊かな心で晩年を生きる

格言に学ぶ 断えず向上して終身努力す

人生百年時代を豊かに

「人生百年時代」という言葉を耳にする機会が増えました。子育て・孫育てを終えた後も人生は続いていく、そして七十代から八十代になっても現役で働く……、そんな時代が到来しつつあります。

歴史上、「不老長寿」は人類の憧れでしたが、「不老」はともかくとして、「長寿」は多くの人が手にするようになりました。しかし同時に、先人に比べて長く生きなければならぬ分、年齢をどう重ねていけばよいのか、手探りの部分も多くなりました。年金の受給や遺産の相続、病や健康上の問題、お墓のトラブルなど、長く生きられるようになったからこそその不安も多くあります。

加えて今年には、自然災害のほか、世界規模で新型コロナウイルス感染症の猛威を経験しました。長い人生も世の中も先行きが不透明ですが、そうした不確実なことが多い世の中だからこそ、人は安心や幸せを求めるものです。

では、長い人生の晩年を、心豊かで幸せに生きるための秘訣とはいったいなんでしょうか。

人生を振り返る意味

年齢を重ね、人生経験が増えてくると、自分の人生を振り返ることが多くなります。そうして振り返ったことを身近な人たちと共有することもあるでしょう。直接話さなくても、日記や自分史、最近ではエンディングノートなどの形で、人生を書き留める方もいます。

教育人間学という分野を開拓した京都大学名誉教授の故・下程勇吉氏は、「過去に対して感謝し、現在も充実しているとなると、自分の将来に対しても、自ずと希望の光が射してくる」(増補『宗教的自覚と人間形成』広池学園出版部)という考え方を示し、過去への感謝こそ未来への希望につながるかと述べています。

ここでいう未来とは、自分の未来に限られるものではありません。私たちが残す人生の足跡は、次世代の人たちにとっては、これから先の長く不確実な人生を生き抜くための先人の知恵、あるいは指針となるのです。



晩年は道徳的な円熟期

総合人間学モラロジーの創業者である廣池千九郎(一八六六―一九三八)もまた、後世に伝えるべき生き方の知恵を、「格言」という形に凝縮して数多く残しました。その一つ、「断えず向上して終身努力す」には、晩年を心豊かに生きるためのヒントがあります。

「前半生は道徳的に努力して、社会的な地位、名誉、財産などを得ても、後半生に至ると、その精神が緩んで、節制を欠き、勝手気ままな言動をとり、人に対して無慈悲になってしまう人が少なくありません。その結果、みずからの健康を害し、家族や周囲の人々からも疎まれ、結局、孤独で寂しい生涯を終えることになるのです」(『最高道徳の格言』モラロジー研究所、七〇頁)

若いときには若いときの、晩年には晩年の苦勞があります。人間関係も世代や環境で変わりますから、現実起こる問題には解決の特効薬はありません。そこで廣池はこの格言を残し、事あるごとに自分を顧みて、終生道徳的な努力を積み重ねていく大切さを説いたのでしよう。さらに、「盛時には驕らず衰時には悲し

まず」という格言も示唆的です。人生には順風満帆な時期と、何をしてもうまくいかない時期があるものです。年齢を重ねると、どうしても体力的には衰えて、できないことも増えますが、そのときに心構えをどう持つかが重要です。

「高齢化社会を迎えた今日、多くの人々は長寿に恵まれるようになっていきます。高年齢は、身体的能力は衰退してきますが、精神的、道徳的にはますます円熟していく可能性のある時期です」(同、一一九頁)

私たちは、体力や記憶力などの衰えに注目しがちですが、年齢を重ねたからこそ達することができると精神的な成熟の境地にも目を向けるべきではないでしょうか。自分という存在の意味や役割、次世代に伝えられる考え方や生き方に思いを向ければ、希望の光は見えてきます。

私たちの人生は、自分中心の生き方でも、ある程度まで幸せな結果を得られるでしょう。しかし、晩年までそのような生き方を続けていけば、心寂しく孤独な人生が待っています。自分の来し方やかかわり合う人々に感謝し、その思いを次世代へつないでいくことこそが、心豊かで幸せに生きる秘訣なのではないでしょうか。(本誌)

『最高道徳の格言』
モラロジー研究所
本体800円+税

お求めは
こちら
から 